

チェコの音楽

— 民族の音楽を確立するまでの長い歴史 —

小宮正安



「ブラハの春」音楽祭の開幕演奏会が行われる市民会館（スメタナホール）の外観
©Hans Peter Schaefer

2017年5月、チェコの有名音楽祭「ブラハの春」の開幕演奏会に、オーストリアの代表的なオーケストラのウィーン・フィルハーモニー管弦楽団が出演。スメタナの連作交響詩〈我が祖国〉を演奏し、歴史的な出来事として大反響を巻き起こした。なぜか？

チェコ音楽の歴史とともに、その理由を振り返ってみよう。

あるイギリス人の旅行記から

18世紀後半、ヨーロッパ大陸を旅したひとりのイギリス人がいる。チャールズ・バーニー（1726～1814）という人物だ。その彼が記した旅行記に、チェコの記事が出てくる。正確に言えば、ブラハを中心にチェコの西部地域にあたるボヘミアについて。

曰く、ボヘミアでは音楽教育が盛んで、小学校でも読み書き計算と並び、音楽の授業があった。小さな村であれば、教会のオルガニストが学校の音楽教師を務め、自身の住まいも音楽教室として開放した。結果、ボヘミアは優れた音楽家を次々と輩出した……。

例えば、当時ヨーロッパ有数の音楽都市として頭角を現していたドイツ中西部のマンハイム。この街の宮廷楽団をトップクラスの団体に押し上げた功労者の一人が、ボヘミア出身のヴァイオリニスト、ヨハン・ヴェンツェル・シュターミツ（1717～57）である。また、彼の息子のカール（1745～1801）とアントン（1754～？）も、ヨ

ーロッパ各地で活躍している。

音楽史でいえば、いわゆる「古典派」の時代にあって、ボヘミア出身の音楽家が果たした役割は無視できない。

流出を遂げるボヘミア人音楽家

ただし、バーニーは次のようにも記している。ボヘミアでは優れた音楽家の受け皿がないため、結局は人材流出が起きてしまっている。その理由は何だろう。

中世のボヘミアは、強大な王国だった。チェコ系の人々が数多く住む国でありながら、ドイツ地域の君主連合体＝神聖ローマ帝国に属し、オーストリアにまで勢力を伸ばしていったからである。ところが、帝国内のドイツ系諸侯がボヘミア王国の勢力拡大を恐れ始めた。そしてついに、その力を押さえつけるために、ドイツ系の助っ人一族をアルプス山中から呼んできた。

その一族こそがハプスブルク家。ハプスブルク家はボヘミア王と一戦を交えて勝利を収め、オーストリアに領地を構えると、戦争や婚姻政策によって力をつけ、16世紀以降は神聖ローマ帝国皇帝の地位を独占。さらにはボヘミア王国の君主も兼任するようになった。こうしてボヘミアは、オーストリア・ハプスブルク家の支配下へと組み込まれてしまったのである。

高まる民族意識の中で

このような状況の下、ボヘミアに優秀な音楽家が居つかなかったのは当然だろう。ところが19世紀になると、変化が現れる。

19世紀とは、特権階級に支配されてきた市民階級が社会進出を遂げるべく、闘いを繰り広げた時代だった。と同時に、自分の属する民族を大国の支配から解き放ち、独立を遂げようとする動きも急速に高まってゆく。

ボヘミアも例外ではない。ドイツ系のハプスブルク家の言いなりではなく、チェコ系の民族としての意識に目覚め、来たるべき国家再建に備えよう。しかもその際、多くの人々にチェコ人としての意識を浸透させるべく、文化を通じた民族意識の覚醒を図ろう……と。

面白いのは、こうした動きが、政治的には宿敵であるはずのドイツ人に触発さ

れた点である。例えば、一時期プラハのエステート劇場で楽長として活躍した一方で、ドイツ語に基づくドイツ人のためのオペラを数多く作ったカール・マリア・フォン・ウェーバー（1786～1826）。彼の姿勢は、ボヘミアの文化政策に大きなヒントをもたらした。

穏健な目論みが崩された時



シュクロウブ

ついには、ハプスブルク家の支配下でドイツが公用語とされてきた慣例を破り、チェコ語を用いたオペラが作られてゆく。その先駆的作品が、フランティšek・シュクロウブ（1801～62）作曲、ヨセフ・カイェターン・ティル（1808～56）台本によるオペラ〈フィドロヴァチカ〉だ。劇中に現れる旋律と歌詞は、現在チェコ国歌としても親しまれている。

こうした動きがさらに強まった結果、プラハにチェコ人のための国民劇場を建設する計画も本格化。1862年に仮劇場が、1881年には本劇場が開場した。

ところで仮劇場から本劇場に至るまでの間、ボヘミアとハプスブルク家の関係はさらに悪化した。というのも1867年、ハプスブルク家は、ハンガリー人の自治権を認める「オーストリア＝ハンガリー帝国」を発足させたからである。もともと



1881年当時のプラハ国民劇場

ボヘミアの知識人の間には、ドイツ系、ボヘミア系、ハンガリー系の三つの有力民族が自治権を獲得し、ハプスブルクの巨大帝国の維持に努めればよいという穏健な意見があった。だがその目論みは、脆くも崩されてしまったのである。

ボヘミア以外の地域への意識

こうなった以上、ハプスブルク家の支配下から完全に独立すべし。そんな動きの急先鋒に立った一人が、ベドルジハ・スメタナ（1824～84）だった。

若い頃の彼はドイツ語を母語とし、ハプスブルク家の前皇帝フェルディナント

（1793～1875）の音楽教師を務めていたほどに、さほど民族主義的でなかった。ところがやがて、国民劇場と密接な関係を持ち、ついにはチェコ語のオペラや、愛国的な連作交響詩〈我が祖国〉を完成させてゆく。あるいは彼の後輩にあたるアントニン・ドヴォルザーク（1841～1904）も、チェコ人の音楽を作ることを強烈に意識し続けた。いわゆる「ボヘミア楽派」の誕生である。

だが、それに不満を抱いたチェコ系の音楽家もいた。典型的存在が、レオシュ・ヤナーチェク（1854～1928）。彼の出身地は、ボヘミア主導の民族運動が進む中、そこから取り残された感のあるチェコ東部のモラヴィアだったからである。モラヴィアへの配慮を欠いては、チェコの全き独立もありえない……。彼がモラヴィアの民謡を積極的に研究したり、モラヴィアの中心地ブルノで活躍したりした背景には、そうした政治状況が存在した。



スメタナ



ヤナーチェク

数々の困難を乗り越えて

そんな先人たちの悲願が、ついに実を結ぶ。1918年、第一次世界大戦での敗北を機にハプスブルク家の帝国が崩壊し、チェコスロヴァキアが誕生したのだ。

そんな激動の中で青春時代を送った音楽家が、ボフスラフ・マルティヌー（1890～1959）である。ボヘミアとモラヴィアの境という、新生チェコ国内の融和を象徴する地で生まれた彼は、プラハでヨセフ・スーク（1874～1935）に師事。やがて留学を機にパリに住むようになる。だが、ナチス・ドイツがチェコスロヴァキアを占領するに及び、祖国に帰れなくなってしまった。

さらに第二次世界大戦が終結し、ナチス・ドイツの脅威が去ったのも束の間、チェコスロヴァキアはソビエト連邦の傘下に組み込まれてしまう。こうした中で辛酸をなめた音楽家の典型が、微分音の開拓者として知られるアロイス・ハーバ（1893～1973）。ナチス・ドイツの占領下で活動禁止処分を受けていた彼は、今度は共産党の意思に反する先鋭的芸術家として迫害に晒された。

ついにチェコが自由を獲得したのは、1989年のビロード革命を経て、1993年

にチェコ共和国が誕生してからである。それから25年近くを経て、冒頭に書いたように、音楽を通じたチェコとオーストリアの「和解」が、ようやくもたらされたのだった。

歴史に翻弄されながらも活躍してきたチェコの指揮者たち

「指揮者」という専門職が誕生したのは、20世紀初頭のこと。奇しくもそれとほぼ同時期に、1918年にチェコが独立を果たす中（1993年まではチェコスロヴァキア）、祖国の音楽を自らのアイデンティティとして重視する指揮者が続々と登場する。

ただしその道のりは、前述したように平坦ではなかった。1894年創設のチェコ・フィルハーモニー管弦楽団を飛躍的に向上させたヴァーツラフ・ターリヒ（1883～1961）は、ナチス・ドイツの人権蹂躪^{じゅうりゃく}が苛烈^{しつれつ}さを増す中で、同楽団の首席指揮者を辞す。彼の後任となったラファエル・クーベリック（1914～96）は、祖国がソ連の傘下に組み込まれる中で亡命。さらに彼の後任を務めたカレル・アンチェル（1908～73）も、1968年に起きたソ連軍の軍事介入、いわゆる「プラハの春事件」を機に祖国を去る。日本でお馴染みのズデニェク・マーカル（1936～）も、将来を嘱望^{しよくぼう}されながら、長らく亡命生活を強いられた一人だ。

一方、あえてそうした状況下のチェコで活躍した指揮者たちもいた。アンチェルの後を継いで、チェコフィルハーモニー管弦楽団の指揮者となったヴァーツラフ・ノイマン（1920～95）もその一人である。だが、彼は政権におもねるのではなく、1989年に起きたビロード革命に積極的にかわり、活動家を応援した。あるいは、彼より10歳ほど年下のラドミル・エリシュカ（1931～2019）の場合。ビロード革命以前には西側で活動することがほぼ不可能であったがために、逆にチェコの伝統的な解釈を守り続ける数少ない存在として、日本でもたびたび指揮台に上がった。

革命を通じた民主化は、自由な空気をチェコにもたらす半面、世界中の指揮者が流入し、チェコ人指揮者の祖国での活躍が狭められる、という皮肉な現象を生んだ。チェコ・フィルハーモニー管弦楽団の首席指揮者に就任しながら、その座を一時追われたイルジ・ビエロフラーヴェク（1946～2017）は、典型的な存在だろう。だが逆に、彼の弟子であるトマーシュ・ネトピル（1975～）やヤクブ・フルシャ（1981～）といった若い世代は、チェコに片方の軸足を置きつつも、世界中を股にかけてはつらつ^{はつらつ}澁刺^{しつさ}と活躍している。

〈こみや まさやす・ヨーロッパ文化史研究家、横浜国立大学教授〉

12月の公演

イギリスの名匠ボルトンが〈第九〉を指揮！ 高らかに響く“歓喜の歌”



©Ben Wright Photography
アイヴァー・ボルトン



©Gisela-Schenker ©井村重人
シュヴァルツ 池田香織



©Marco Borggreve
小堀勇介 オリーマンズ

12/17 火 SHINRYO Presents 〈第九〉特別演奏会
東京芸術劇場コンサートホール 19:00

12/18 水 FUJITSU Presents 〈第九〉特別演奏会
サントリーホール 19:00

12/20 金 第627回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

12/21 土 第223回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/22 日 第223回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

12/24 火 第24回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪) 19:00

指揮=アイヴァー・ボルトン

ソプラノ=シルヴィア・シュヴァルツ

メゾ・ソプラノ=池田香織

テノール=小堀勇介

バリトン=トーマス・オリーマンズ

合唱=新国立劇場合唱団

合唱指揮=三澤洋史

ベートーヴェン: 交響曲 第9番〈合唱付き〉

●17、18日公演のみ、前半に福本茉莉によるオルガン演奏
(約15分)を行います。

※当初の発表から出演者が一部変更されました。

お申し込み・お問い合わせ

読響チケットセンター 0570-00-4390 (10時-18時・年中無休) <https://yomikyo.or.jp/>

12月公演の聴きどころ

12月は、年の瀬の日本を彩る風物詩、ベートーヴェン〈第九〉公演を12月17日から24日まで計6回開催する。国境や世代を超えて多くの人に感動をもたらし、クラシック音楽の歴史に燦然と輝く不朽の名作を堪能したい。

今年の指揮台にあがるのは、欧州を中心に活躍する名匠アイヴァー・ボルトン。ボルトンは、スペインの名門マドリッド王立劇場音楽監督、バーゼル響首席指揮者を務めるほか、ウィーン国立歌劇場、英国ロイヤル・オペラ、パリ・オペラ座など世界の一流歌劇場に招かれ、オペラとシンフォニーの双方で活躍している。また、ザルツブルク・モーツァルテウム管桂冠指揮者も務め、とりわけ古典派の音楽に精通したボルトンが、説得力のある解釈でベートーヴェンの神髄に迫る。

声楽陣には世界で活躍する実力派が揃う。ソプラノは、ミラノ・スカラ座、ベルリン国立歌劇場、エディンバラ音楽祭など世界最高峰のオペラハウスや音楽祭に出演し、アバド、メータらとも共演したシルヴィア・シュヴァルツが読響初登場。メゾ・ソプラノは、今年6月の東京二期会〈サロメ〉(ヴァイグレ指揮)で圧倒的な歌唱を披露した池田香織。精緻な音楽性と多彩な感情表現でめざましい躍進を続ける実力派が、〈第九〉でもその確かな歌唱力を聴かせてくれるだろう。テノールの小堀勇介は、イタリアで学び欧州の音楽祭に出演するなど、国内外で活躍している新星。瑞々しい歌声に注目したい。バリトンは、英国ロイヤル・オペラ、ザルツブルク音楽祭などに出演し、バロックから現代音楽作品まで幅広いレパートリーを誇るトーマス・オリーマンズが務める。

合唱には、2007年以来読響〈第九〉公演で共演を重ねる日本最高峰のプロ団体・新国立劇場合唱団を迎え、“歓喜の歌”を高らかに響かせる。 (文責:事務局)

〈ボレロ〉で新年の幕開け！ ドイツの新鋭グランディが贈る名曲選



1/9 木 第628回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮＝**エリアス・グランディ**
ヴァイオリン＝**前橋汀子**
J.シュトラウスII: **喜歌劇〈こうもり〉序曲**
サン＝サーンス: **序奏とロンド・カプリチオーソ**
マスネ: **タイスの瞑想曲**
サラサーテ: **ツィゴイネルワイゼン**
モーツァルト: **交響曲 第35番〈ハフナー〉**
ラヴェル: **ボレロ**

日下紗矢子ら読響メンバーが繰り広げる白熱のアンサンブル



1/10 金 第24回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (プレ・トークあり)

《**日下紗矢子リーダーによる室内合奏団**》
ヴァイオリン＝**日下紗矢子** (読響特別客演コンサートマスター)
モーツァルト: **ディヴェルティメント 第11番**
シェーンベルク: **浄夜** (弦楽合奏版)

下野竜也が現代音楽2作品を日本初演&アダムズでは上野耕平が共演



1/15 水 第594回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝**下野竜也**
サクソフォン＝**上野耕平**
ショスタコーヴィチ: **エレジー**
ジョン・アダムズ: **サクソフォン協奏曲**
フェルドマン: **On Time and the Instrumental Factor**
(日本初演)
グバイドゥーリナ: **ペスト流行時の酒宴** (日本初演)

読響チケットWEB <http://yomikyo.pia.jp/>

インターネットで24時間いつでもお申し込みができ、ご自身でお好みの座席をお選びいただけます。上記URLもしくはホームページのトップページ【読響チケットWEB】のボタンから、ぜひご利用ください。

※初回お申し込み時は利用登録(無料)が必要です。

熱狂のクライマックス！ 俊英・山田が振るマーラー〈巨人〉



2/1 土 第224回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/2 日 第224回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14:00

2/4 火 第25回 大阪定期演奏会
フェスティバルホール(大阪) 19:00

指揮＝**山田和樹** (首席客演指揮者)
ヴァイオリン＝**ネマニャ・ラドゥロヴィチ**
マーラー: **花の章**
ハチャトゥリアン: **ヴァイオリン協奏曲**
マーラー: **交響曲 第1番〈巨人〉**

ピアノの鬼才ポゴレリッチが共演するシューマンの傑作協奏曲



2/11 火・祝 第117回 みなとみらいホリデー名曲シリーズ
横浜みなとみらいホール 14:00

2/13 木 第629回 名曲シリーズ
サントリーホール 19:00

指揮＝**山田和樹** (首席客演指揮者) ピアノ＝**イーヴォ・ポゴレリッチ**
グリーグ: **二つの悲しき旋律**
シューマン: **ピアノ協奏曲**
ドヴォルザーク: **交響曲 第7番**

指揮者・上岡がピアノを弾き繰り広げる充実の室内楽



2/14 金 第25回 読響アンサンブル・シリーズ
よみうり大手町ホール 19:30 (プレ・トークあり)

《**上岡敏之と読響メンバーの室内楽**》
ピアノ＝**上岡敏之**
フォーレ: **ピアノ五重奏曲 第2番**
ショーンソン: **ピアノ、ヴァイオリンと弦楽四重奏のための協奏曲**

欧米で活躍するマイスターのブルックナー2番&名手テツラフのベルク



2/28 金 第595回 定期演奏会
サントリーホール 19:00

指揮＝**コルネリウス・マイスター** (首席客演指揮者)
ヴァイオリン＝**クリスティアン・テツラフ**
ヘフティ: **変化** (日本初演)
ベルク: **ヴァイオリン協奏曲〈ある天使の思い出に〉**
ブルックナー: **交響曲 第2番**

■東京芸術劇場 presents
井上道義&読売日本交響楽団

12/6 19:00
金 東京芸術劇場コンサートホール

指揮=井上道義
メゾ・ソプラノ=池田香織
合唱=首都圏音楽大学合同コーラス
児童合唱=TOKYO FM少年合唱団

マーラー: 交響曲 第3番

[料金] S¥6,500 A¥5,500 B¥4,500 C¥3,500 D¥2,500 高校生以下 ¥1,000
[お問い合わせ] 東京芸術劇場ボックスオフィス 0570-010-296 (10~19時/休館日を除く)

■ウェスタ川越 読響ニューイヤー・コンサート

2020年1/5 14:00
日 ウェスタ川越 大ホール

指揮=原田慶太楼
ヴァイオリン=前橋汀子

J. シュトラウスII: 喜歌劇〈こもり〉序曲
メンデルスゾーン: ヴァイオリン協奏曲
ドヴォルザーク: 交響曲 第9番〈新世界から〉

[料金] S¥5,000 A¥4,000 (ウェスタ川越 WEB メンバーズ割引あり westa-kawagoe.jp)
[お問い合わせ] 読響チケットセンター 0570-00-4390 (10~18時)

■フレッシュ名曲コンサート

2020年1/19 15:00
日 武蔵野市民文化会館

指揮=太田 弦
ピアノ=鐵 百合奈

チャイコフスキー: 歌劇〈エフゲニー・オネーギン〉から“ポロネーズ”
ショパン: ピアノ協奏曲 第2番
チャイコフスキー: 交響曲 第6番〈悲愴〉

[料金] 一般 ¥2,500 (友の会 ¥2,250)
[お問い合わせ] 武蔵野文化事業団 0422-54-2011 (9~22時/年末年始を除く)

2020-21シーズンの聴きどころ①

常任指揮者セバスティアン・ヴァイグレを柱として、首席客演指揮者山田和樹、桂冠指揮者シルヴァン・カンブルラン他、ベテランから若手まで充実の指揮者陣が顔をそろえた。《第600回記念定期演奏会》ではヴァイグレの指揮のもと、〈ワルキューレ〉第1幕が演奏されるのも大きな話題となる。〈飯尾洋一 音楽ライター〉

定期演奏会

Subscription Concert

4月、新シーズンの開幕を告げるのは、スイスのマリオ・ヴェンツァーゴ。室内オーケストラを起用したブルックナーの交響曲全集の録音で話題を呼んだ才人である。交響曲第3番で新時代のブルックナー像を築く。バーバーのヴァイオリン協奏曲では、オランダ出身の気鋭シモーネ・ラムスマが独奏を務める。

5月は新たに読響の指揮者／クリエイティヴ・パートナーに就任する鈴木優人が登場。シューベルトの交響曲第4番〈悲劇的〉と、シューベルトの未完作品を創造的に補筆したベリオの〈レンダリング〉が対置される。世界最高峰のトランペット奏者マティアス・ヘフスは、ベームのトランペット協奏曲を共演。

6月はシルヴァン・カンブルランが、ドビュッシー、細川俊夫、ヴァレーズというプログラムで帰ってくる。ヴァレーズの〈アルカナ〉は、作曲者によれば「力と活気、太陽に満ちた作品」。カンブルランの緻密な色彩感覚は大編成の作品で最大限に生かされる。

7月の記念すべき《第600回記念定期演奏会》を指揮するのは、もちろんセバスティアン・ヴァイグレ。得意のワーグナー・プログラムだ。楽劇〈ワルキューレ〉第1幕(演奏会形式)では、オペラ指揮者としてのヴァイグレの手腕が発揮される。ジークムント役は大ベテラン、ペーター・ザイフェルト。ジークリンデ役のジェニファー・ホロウェイ、フンデ



マリオ・ヴェンツァーゴ
Mario Venizago



シモーネ・ラムスマ
Simone Ramstein



鈴木優人
Mutsaers



マティアス・ヘフス
Matthias Heuss



シルヴァン・カンブルラン
Sylvain Camballan



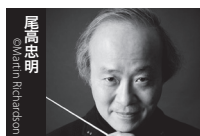
セバスティアン・ヴァイグレ
Sebastian Vaisgr



ペーター・ザイフェルト
Peter Zaifert



ジェニファー・ホロウェイ
Jennifer Hodel



イング役の**ファルク・シュトルックマン**とともに、充実したキャストがそろう。

9月は名誉客演指揮者、**尾高忠明**がイギリス音楽中心のプログラムを組んだ。ウェールズ出身の女性作曲家**ウィリアムズ**の〈海のスケッチ〉、ウォルトンのエネルギッシュな**交響曲第1番**が並ぶ。**アンナ・ヴィニツカヤ**は、バルトークの**ピアノ協奏曲第3番**でスケールの大きな演奏を聴かせてくれるはず。

10月はバリオード楽器を用いる「レ・シエクル」での活動で話題を呼ぶ**フランソワ・グザヴィエ・ロト**が読響に再登場。マーラーの**交響曲第7番〈夜の歌〉**は一筋縄ではいかない作品だが、ロト流のマーラーはいかに。オランダ・バッハ協会管弦楽団の音楽監督を務める**佐藤俊介**は、ソリストとしてモーツァルトの**ヴァイオリン協奏曲第3番**を披露する。

11月はアルゼンチン出身の**アレホ・ペレス**が招かれる。すでにザルツブルク音楽祭にも出演した新星だ。ショスタコーヴィチの**交響曲第12番〈1917年〉**に挑む。チェロの**イサン・エンダース**は、エトヴェシュの〈チェロ合奏協奏曲〉を日本初演する。

12月はふたたび常任指揮者**ヴァイグレ**が指揮台に立つ。こちらも得意のブルックナーで、**交響曲第6番**を指揮。**キット・アームストロング**はモーツァルトの**ピアノ協奏曲第25番**を演奏する。才気煥発^{かんぱつ}のソロを期待。

2021年1月も引き続き**ヴァイグレ**の指揮で、ドイツ音楽プログラムが組まれた。R.シュトラウスの**交響詩〈マクベス〉**、トーマス・ツェートマイアーの独奏によるハルトマンの〈葬送協奏曲〉、 Hindemith の**交響曲〈画家マティス〉**の3曲からは、権力者、ナチス・ドイツといったキーワードが思い浮かぶ。

3月は首席客演指揮者の**山田和樹**が、読響ソロ・ヴィオラ奏者の**鈴木康浩**と別宮貞雄の**ヴィオラ協奏曲**を共演、邦人作品に光を当てる。**グラズノフの交響曲第5番**は雄大でドラマティック。名作再発見の一夜となるか。